

体育授業における目標志向性、動機づけ、楽しさの関係

藤田 勉〔鹿児島大学教育学部（保健体育）〕

Relationship to goal orientation, motivation, and enjoyment in physical education

FUJITA Tsutomu

キーワード：達成目標理論、自己決定理論、内発的・外発的動機づけ階層モデル、運動意欲、スポーツ

1. はじめに

体育授業を好きになるきっかけとして多く挙げられるのは、「泳げるようになった」、跳び箱が跳べるようになった、「上手にできて褒められた」など、能力に関するものである（杉原，2003）。有能感は能力に関する構成概念として、動機づけの中核となる要因であると考えられており（Elliot & Dweck, 2005）、スポーツにおいても、参加、継続、離脱に影響する重要な要因であると考えられてきた（Duda, 2005）。体育・スポーツ心理学において注目されている動機づけ理論のひとつである達成目標理論（Nicholls, 1989; Dweck, 1999; Elliot & McGregor, 2001）は、有能感そのものというよりは、有能さの価値に着目しており、有能さを希求すること（上淵，2004）へのアプローチの違いにより、認知・情動・行動が異なることを説明する。

達成目標理論の中でも、Nicholls（1989）のモデルに基づく目標志向性は、目標の捉え方の傾向として研究が展開され、運動に取り組むというような達成場面における有能さの捉え方についての個人差によって諸変数への影響を説明してきた。目標志向性には、課題志向性と自我志向性の2つがあり、体育・スポーツの場面へ応用したDudaの研究レビュー（Duda, 2001; Duda & Hall, 2001; Duda, 2005）を参考にすると、それぞれの目標志向性には以下の特徴があると考えられる。課題志向性は、能力の評価基準を自己言及的なものとして、努力すること、熟達することを有能と捉え、自我志向性は、能力の評価基準を他者言及的なものとして、他者より優れること、他者より少ない努力で成功することを有能と捉える。これら目標志向性を規定するのは能力概念であると考

えられており、能力と努力を同じもの（未分化概念）とする傾向が強ければ、課題志向性になりやすく、能力と努力を別のもの（分化概念）とする傾向が強ければ、自我志向性になりやすいと考えられている。

Nicholls（1989）は、目標志向性と諸変数の関係について、課題志向性は、能力の認知の高低に関わらず、適応的であるが、自我志向性は、能力の認知が高ければ、適応的になり、能力の認知が低ければ不適応的になるとしている。これは、課題志向性の場合、努力した量が能力の高さを意味することから、個人レベルの熟達度を重視し、結果に関係なく、適応的でいられるが、自我志向性の場合、他者よりも優れていることが能力の高さを意味することから、他者と比較した結果次第では、適応的にも不適応的にもなると考えられるためである。

Duda & Ntoumanis（2003）は、体育授業における目標志向性の研究レビューにより、課題志向性の方が自我志向性よりも、楽しさやフローなどの肯定的な感情、内発的動機づけや同一化的調整のような自律性の程度が高い動機づけに対して適応的であること、さらには、課題志向性はスキルの改善や学習方略と正の関連があること、自我志向性は社会的手抜きと正の関連があることを報告し、動機づけ関連要因のみならず、学習への取り組み方についても、課題志向性の方が自我志向性よりも適応的であるとの報告がなされた。

わが国では、細田・杉原（1999）が、体育授業において、有能感の高低を加味して目標志向性と動機づけの関係を検討したところ、目標志向性の種類に関係なく、有能感の高低が動機づけを規定することを示した。これは、課題志向性は有能感

の高低に関わらず動機づけが高く、自我志向性は、有能感が高い場合には動機づけは高いが、有能感が低い場合には動機づけが低いといった Dweck (1986) に基づいた仮説を支持するものではなかったが、自我志向性で有能感が低い場合が最も動機づけが低くなることが示されており、課題志向性の方が自我志向性よりも適応的な動機づけであることは、これまでの研究と同様の結果であった。

しかしながら、細田・杉原 (1999) の研究では、Hater (1981) の理論に基づいた内発的・外発的尺度が使用された。この尺度の回答方法では、どの程度内発的に動機づけられているかあるいはどの程度外発的に動機づけられているかを測定できない。このことについては、Vallerand & Fortier (1998) や Guay (2001) も指摘している。伊藤 (1996) は、回答方法を変えて Hater (1981) の理論に基づいた尺度をスポーツの場面で作成したところ、内発的動機づけ尺度と外発的動機づけ尺度の相関が、 $-.41$ であったことを示した。このことから内発的動機づけと外発的動機づけを両極に位置づける回答方法は妥当ではないと考えられるため、他の尺度を使用する必要がある。

欧米の体育・スポーツ心理学では、1990年代前半まで、楽しさ、努力、緊張、有能感を測定する IMI (Intrinsic Motivation Inventory, McAuley et al., 1989) が内発的動機づけの指標として使用されてきたが、Vallerand & Fortier (1998) や Guay et al. (2001) によれば、楽しさは動機づけというよりも結果要因であるという。また、Duda & Hall (2001) は、IMIを使用した場合には、自我志向性との関連に一貫した研究結果が示されないとして、自己決定理論に基づいて開発された Sport Motivation Scale (SMS, Pelletier et al., 1995) のような内発的動機づけ、外発的動機づけ (同一化的調整、外的調整、非動機づけ)、非動機づけの全てを測定できる多次元的な尺度を媒介変数あるいは調整変数として使用することを推奨している。

Standage et al. (2002) は、体育授業において、目標志向性と状況的動機づけとの相関関係を検討した結果、課題志向性は、内発的動機づけ及

び同一化的調整と正の相関、外的調整及び非動機づけと負の相関が示され、自我志向性は、内発的動機づけ及び同一化的調整とは有意な相関が示されず、外的調整及び非動機づけとは正の相関が示された。このことと、楽しさが動機づけの結果要因であることを踏まえれば、目標志向性と楽しさの関係を内発的動機づけ、外発的動機づけ、非動機づけが媒介するという Duda & Hall (2001) が示唆したモデルが考えられる。そこで本研究では、体育授業において、目標志向性から動機づけを媒介して楽しさへ影響する因果モデルを検討する。

細田・杉原 (1999) の研究では、目標志向性と動機づけの関係について、有能感を加味した分析が行われたにも関わらず、目標志向性よりも有能感が動機づけを規定している結果が示されたことから、本研究では、有能感を加味せずに分析を行う。村山 (2003) は、成績目標 (自我志向性) に関する結果の非一貫性の原因は有能感を調整変数としなかったことではないとしていることから、有能感の高低を加味した分析を行ったとしても、この問題は解消されないと思われる。

本研究の目的を達成するための手順として、第1に、体育授業用の目標志向性尺度を作成する。細田・杉原 (1999) の尺度では、課題志向性と自我志向性の因子間の相関が中程度の正の相関 ($r=.41$) であった。このことは、欧米で使用されているスポーツ用の目標志向性尺度、TEOSQ (Duda, 1989) や POSQ (Roberts et al., 1998) における両因子間の相関が独立していることとは異なるため、文化的差異として解釈されている (例えば、西田・小縣, 2008; 西田ほか, 2009)。Duda (2001) も、文化的な影響により両因子間の相関は弱から中程度の正の値を示すことがあるとしている。しかしながら、わが国の教育心理学では、上淵 (1995) が学習目標 (課題志向性) 尺度と成績目標 (自我志向性) 尺度の因子間の相関は独立であったことを報告しており、欧米の結果と同様である。わが国と欧米の文化が異なることは当然のことと思われるが、英語から日本語へ訳した尺度を作成する段階で、先述した課題志向性と自我志向性それぞれの特徴をより明確に

項目へ反映させることができれば、因子間の相関はある程度低くなるのではないかと考える。両志向性が直交であることが構成概念妥当性の基準になっているのであれば、それに倣った尺度構成を工夫することが必要である。

第2に、体育授業用の動機づけ尺度を作成する。内発的動機づけ、外発的動機づけ、非動機づけの全てが測定できる多次元的な動機づけ尺度には、スポーツ用 (Pelletier et al., 1995)、体育授業用 (Ntoumanis, 2001)、健康運動用 (Mullan et al., 1997) があることから、これらの尺度を参考にする。動機づけ尺度の妥当性の検討は、Pelletier et al. (1995) に倣い、動機づけの先行要因と考えられている有能感、動機づけの結果要因として考えられている楽しさ及び努力のそれぞれと各動機づけの相関関係を検討する。

そして、第3に、構造方程式モデリングにより、各目標志向性 (課題志向性及び自己志向性) から各動機づけ (内発的動機づけ、同一化的調整、取り入的調整、外的調整、非動機づけ) を媒介して楽しさへ影響する因果モデルを検討する。

2. 方法

1) 調査方法

K県内23校の小学6年生1536名 (男子751名、女子785名) を対象とした郵送による質問紙調査を行った。各小学校では、ホームルーム等の時間を利用し、担任から児童へ調査票が配布された。調査票は、回答終了後、郵送にて回収された。

2) 質問項目

①目標志向性

スポーツ用の目標志向性尺度、TEOSQ (Duda, 1989) とPOSQ (Roberts et al., 1998) を参考に、課題志向性の特徴である努力及び自己言及的な能力評価、自己志向性の特徴である能力及び他者言及的な能力評価が反映される項目になるように、課題志向性5問、自己志向性5問、計10問作成した。

②動機づけ

Pelletier et al. (1995)、Mullan et al. (1997)、Ntoumanis (2001) などの研究で使用された動機

づけ尺度 (運動をする理由をたずねる項目) を参考にして、内発的動機づけ4問、同一化的調整4問、取り入的調整4問、外的調整4問、非動機づけ4問、計20問作成した。

③有能感、楽しさ、努力

動機づけ尺度の基準関連妥当性の検討として、有能感、楽しさ、努力との関連を検討するために、Pelletier et al. (1995) と同様、動機づけの先行要因として、有能感を測定する項目を作成し、動機づけの結果要因として、楽しさ、努力を測定する項目を作成した。これらの項目は、McAuley et al. (1989) の尺度を参考にした。有能感を測定する項目 (4問, $\alpha = .90$) には、「運動をするのは得意な方だ」、「ほとんどの運動は器用にできる」、「自分の運動能力は高い方だ」、「与えられた課題はすぐにできるようになる」、楽しさを測定する項目 (2問, $\alpha = .87$) には「運動をすることはとても楽しい」、「運動をすることにとっても興味がある」、努力を測定する項目 (1問) には、「運動をするときは、常に全力で取り組んでいる」を作成した。

なお、本研究で作成された質問項目の全ては、「全く当てはまらない (1)」から「非常に当てはまる (5)」の5段階で評定するよう回答を求めた。

3) 統計解析

質問項目の分析として、探索的因子分析及び検証的因子分析により尺度の妥当性を検討し、尺度の信頼性の検討として内的整合性 (α 係数) を算出した。探索的因子分析、各尺度の基本統計量 (平均、標準偏差)、相関行列、 α 係数の算出には、SPSS12.0を使用した。尺度の信頼性及び妥当性を検討した後、目標志向性から動機づけを媒介して楽しさへ影響する因果モデルの検討をするために構造方程式モデリングを行った。検証的因子分析及び構造方程式モデリングには、AMOS 5.0を使用し、最尤法により母数の推定値を求め (有意水準5%)、GFI、CFI、RMSEAをモデル適合度指標とした。

3. 結果

1) 質問項目の分析

①目標志向性

課題志向性及び自我志向性を想定して作成した目標志向性に関する10項目について、因子の抽出方法を主因子法、因子軸の回転方法をプロマックス回転として、探索的因子分析を行い、各因子を構成する項目の因子負荷量が.40以上であることを条件に因子を解釈したところ、課題志向性及び自我志向性と解釈される2因子（各5項目で構成）が抽出された（表1）。課題志向性因子と自我志向性因子間の相関は、.30であり、弱い正の値が示された。TEOSQやPOSQのように、因子間の相関は直交にはならなかったが、細田・杉原（1999）の尺度に比べれば、両因子間の相関は低かった。今後、さらに内容的妥当性を検討していけば、両因子間の相関が直交になる尺度を構成することができるのではないかと考えられる。その後、検証的因子分析を行ったところ、GFI=.951, CFI=.952, RMSEA=.080という良好なモデル適合度が示された。尺度の信頼性の検討として、内的整合性を算出したところ、課題志向性が、 $\alpha = .85$ 、自我志向性が、 $\alpha = .87$ であり、両尺度とも満足する水準であった。

②動機づけ

内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れ的調整、外的調整、非動機づけを想定して作成した20項目について、因子の抽出方法を主因子法、因子軸の回転方法をプロマックス回転として、探索的因子分析を行い、各因子を構成する項目の因子負荷量が.40以上であることを条件に因子を解釈し

たところ、内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れ的調整、外的調整、非動機づけと解釈される5因子（各4項目で構成）が抽出された（表2）。その後、検証的因子分析を行ったところ、GFI=.943, CFI=.945, RMSEA=.055という良好なモデル適合度が示された。尺度の信頼性の検討として、内的整合性を算出したところ、内発的動機づけ尺度が、 $\alpha = .81$ 、同一化的調整尺度が、 $\alpha = .87$ 、取り入れ的調整尺度が、 $\alpha = .79$ 、外的調整尺度が、 $\alpha = .79$ 、非動機づけが、 $\alpha = .86$ であり、いずれの尺度も満足する水準であった。

2) 基本統計量と相関行列

各尺度得点の平均値、標準偏差、相関行列を表3に示した。目標志向性と動機づけの関係について、課題志向性及び自我志向性は、内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れ的調整と正の相関があり、非動機づけと負の相関があった。外的調整は、課題志向性と相関がなかったが、自我志向性とは相関があった。

動機づけの先行要因である有能感と動機づけの関係について、有能感は、内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れ的調整と正の相関が示され、外的調整及び非動機づけと負の相関が示された。また、内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れ的調整は、動機づけ結果要因である楽しさ、努力と正の相関が示され、外的調整及び非動機づけと負の相関が示された。各動機づけ間の相関については、内発的動機づけと同一化的調整など、概念的に隣接すると考えられている動機づけ間には正

表1. 探索的因子分析の結果（目標志向性）

番号		1	2	
自我志向性 ($\alpha = .87$)	1	自分が他の誰よりも優れていると思ったとき.	0.88	-0.03
	2	他の人よりも活躍して目立ったとき.	0.80	0.07
	3	他の人と比較して自分の方が優れていたとき.	0.72	0.03
	4	みんなから注目されているとき.	0.70	0.07
	5	自分に勝る人が、しばらくは出てこないと思ったとき.	0.68	-0.14
課題志向性 ($\alpha = .85$)	6	たくさん練習して、ようやく上達したことを感じたとき.	0.00	0.80
	7	一生懸命に努力して、やっとできるようになったとき.	-0.07	0.79
	8	失敗を繰り返しても、少しずつ上達を感じているとき.	-0.03	0.74
	9	自分の持っている最大限の力を出し切ったとき.	0.05	0.68
	10	どうしたらうまくなるのかいろいろと工夫できたとき.	0.04	0.67

表 2. 探索的因子分析の結果（動機づけ）

	番号	項目	1	2	3	4	5
同一化的調整 ($\alpha = .87$)	11	健康的な生活を送るために、やっておいの方が良いから。	0.84	0.00	0.05	-0.01	-0.06
	12	体力をつけて、体調をくずさないようにしたいから。	0.81	-0.02	0.02	-0.03	0.01
	13	運動をしていれば、健康を保つことができそうだから。	0.79	0.04	-0.02	0.04	0.05
	14	病気になるために体調を整えておきたいから。	0.72	-0.02	-0.06	0.01	0.00
非動機づけ ($\alpha = .86$)	15	よく分からない。練習をしても運動が上達するとは思えない。	0.01	0.90	-0.07	0.02	0.06
	16	よく分からない。目標を決めても上手くできる感じがしない。	-0.04	0.76	0.04	-0.02	0.01
	17	よく分からない。運動することが時間の無駄のように感じる。	0.00	0.70	-0.02	0.00	-0.06
	18	よく分からない。運動することにあまり興味を感じていない。	0.01	0.69	0.07	0.00	-0.10
外的調整 ($\alpha = .79$)	19	他の人と同じことをしないと、気まずい感じになりそうだから。	-0.02	-0.01	0.83	-0.06	-0.03
	20	他の人と同じことをしないと、さびしい感じになりそうだから。	-0.05	0.01	0.75	0.07	0.02
	21	運動をしないと、クラスの雰囲気になじめなくなるから。	-0.07	0.03	0.63	0.04	0.08
	22	運動をしないと、授業についていけなくなりそうだから。	0.14	-0.04	0.60	-0.02	-0.05
取り入的調整 ($\alpha = .79$)	23	運動をすると、少しは格好良かった感じがするから。	-0.01	0.00	-0.10	0.90	-0.06
	24	運動をしていれば、何とか格好が付きそうだから。	-0.02	-0.02	0.08	0.80	-0.09
	25	他の人より運動が上手いと、良い気分になられるから。	-0.01	-0.02	0.01	0.54	0.13
	26	他の人より体力があると、気分良く生活できそうだから。	0.12	0.06	0.08	0.45	0.18
内発的動機づけ ($\alpha = .81$)	27	一生懸命に運動をしたときの達成感を体験したいから。	0.02	-0.02	0.05	-0.06	0.77
	28	夢中になって運動をするときの感覚が気持ち良いから。	-0.09	-0.04	-0.03	0.05	0.75
	29	運動ができたときの喜びを味わいたいから。	-0.02	-0.06	-0.02	0.04	0.64
	30	運動をする中で新しい発見をすることができるから。	0.16	0.03	0.00	-0.02	0.61

の相関が示され、内発的動機づけと非動機づけなど、概念的に離れていると考えられている動機づけ間には負の相関が示された。動機づけと先行要因及び結果要因の相関は、Pelletier et al. (1995) や Ntoumanis (2001) とほぼ同様の結果であった。すなわち、本研究では、信頼性及び妥当性の認められた体育授業用動機づけ尺度が作成された。

3) 構造方程式モデリング

目標志向性から動機づけを媒介して楽しさへ影響することを検討するために、「目標志向性（課題志向性及び自我志向性）→動機づけ（内発的動機づけ、同一化的調整、取り入的調整、外的調整、非動機づけ）→楽しさ」という因果モデルを構築した。全ての変数間に影響関係を仮定し、推定値を求め、ワールド検定により有意水準5%に満たなかったパスを削除することでモデル修正を繰り返したところ、最終的に、GFI=.900, CFI=.919, RMSEA=.054という良好なモデル適合度が示された。図上には、潜在変数間の有意なパスのみを示した。観測変数に記されている番号は、探索的因子分析の際の項目番号である（表1及び表

2を参照）。なお、楽しさの2問については、項目番号を31及び32とした。

目標志向性から動機づけへの影響関係について、課題志向性からは、内発的動機づけ ($\beta = .80$) 及び同一化的調整 ($\beta = .57$) へ正の影響、外的調整 ($\beta = -.18$) 及び非動機づけ ($\beta = -.56$) へ負の影響が示され、自我志向性からは、内発的動機づけ ($\beta = .13$) へ正の影響、取り入的調整 ($\beta = .75$) 及び外的調整 ($\beta = .34$) へ正の影響が示された。すなわち、課題志向性からは、自律性の程度が高い動機づけへ正の影響、自律性の程度が低い動機づけへ負の影響が示され、自我志向性からは、内発的動機づけ及び自律性の程度が低い動機づけへ正の影響が示された。

これらの結果のうち、内発的動機づけは両志向性から正の影響を受けているが、課題志向性からの影響指数は高く、自我志向性からの影響指数は低いものであった。また、外的調整も両志向性から影響を受けているが、課題志向性からの影響指数は負の低い値、自我志向性からの影響指数は正の中程度の値であった。

動機づけから楽しさへの影響関係については、

表3. 基本統計量及び相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 課題志向性	3.07	1.00	—							
2 自我志向性	1.96	1.00	0.30	—						
3 内発的動機づけ	3.83	0.84	0.69	0.31	—					
4 同一化的調整	3.87	0.84	0.49	0.15	0.43	—				
5 取り入れの調整	2.62	0.88	0.23	0.65	0.35	0.22	—			
6 外的調整	2.41	0.87	-0.03	0.20	-0.05	0.14	0.35	—		
7 非動機づけ	1.86	0.85	-0.46	-0.12	-0.51	-0.23	-0.06	0.30	—	
8 有能感	2.85	1.00	0.36	0.42	0.49	0.17	0.41	-0.10	-0.38	—
9 楽しさ	4.02	1.07	0.52	0.27	0.65	0.28	0.25	-0.17	-0.58	0.68
10 努力	3.80	1.04	0.56	0.25	0.59	0.32	0.22	-0.10	-0.43	0.49
										0.61
										—

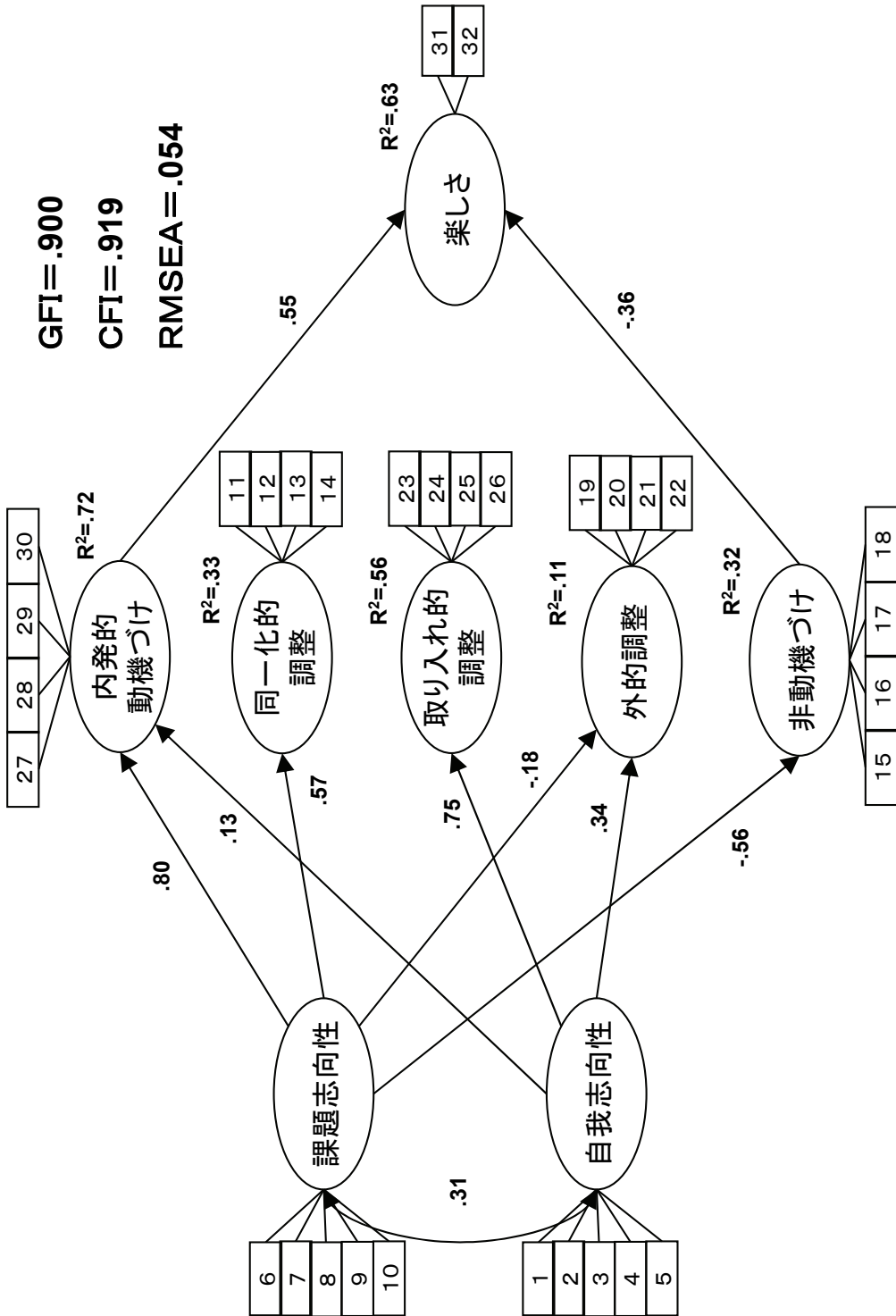


図 1. 構造方程式モデリングの結果

内発的動機づけから正の影響 ($\beta = .55$), 非動機づけから負の影響 ($\beta = -.36$) が示された。これらのことから、因果モデル全体を通して、目標志向性と楽しさの関係は、内発的動機づけ及び非動機づけが媒介することが明らかになった。

考察

本研究の目的は、目標志向性から動機づけを媒介して楽しさへ影響する因果モデルを検討することであった。構造方程式モデリングを行った結果、良好なモデル適合度が示され、目標志向性から動機づけを媒介して楽しさへ影響する因果モデルの妥当性が認められた。

目標志向性から動機づけへの影響関係の結果について、課題志向性から自律性の程度が高い動機づけへ正の影響が示されたことは、課題志向性が高い(低い)児童は、自律性の程度が高い動機づけも高い(低い)ことを意味している。これは、Duda & Ntoumanis (2003) の報告と一致したものであった。

課題志向性から自律性の程度が低い動機づけへの負の影響が示されたことは、課題志向性の高い(低い)児童は自律性の程度が低い動機づけが低い(高い)ことを意味している。課題志向性から内発的動機づけへの影響指数がと高かった ($\beta = .80$) ことからすれば、内発的動機づけと負の相関がある外的調整や非動機づけへは、課題志向性から負の影響が示されることは考えられることである。

自我志向性から内発的動機づけ及び自律性の程度が低い動機づけへ正の影響が示されたことは、自我志向性が高い(低い)児童は、内発的動機づけ及び自律性の程度が低い動機づけも高い(低い)ことを意味している。しかしながら、課題志向性と同様に、自我志向性からも内発的動機づけへ正の影響が示されたにも関わらず、非動機づけへ負の影響が示されなかったのは、自我志向性から、内発的動機づけへの影響が課題志向性ほど強いものではないため、また、非動機づけに隣接する外的調整へは課題志向性から負の影響が示されているのに対して、自我志向性からは正の影響が示されたためと考えられる。

自我志向性と内発的動機づけに正の関連が示されたことについては、Standage et al. (2002) と異なる結果であったが、全体的に見れば、課題志向性の方が自我志向性よりも適応的な動機づけと関連していることは同様の結果であった。また、本研究では、課題志向性と自我志向性の相関が弱い正の相関 ($r = .30$) であったことによって欧米の先行研究と大きく結果が異なるようなことは示されなかった。

各動機づけから楽しさへの影響については、内発的動機づけから正の影響、非動機づけから負の影響が示された。これは、内発的動機づけが高い(低い)児童は楽しさも高く(低く)、非動機づけが高い(低い)児童は楽しさが低い(高い)ことを意味している。すなわち、体育授業の楽しさは内発的動機づけからの正の影響及び非動機づけからの負の影響によるものであると考えられる。

以上のことを総括すると、本研究で明らかになったことは、目標志向性と楽しさを媒介するのは、内発的動機づけ及び非動機づけであること、具体的には、課題志向性及び自我志向性が高い(低い)児童は、内発的動機づけが高く(低く)、非動機づけが低い(高い)こと、内発的動機づけが高い(低い)児童は、楽しさも高く、非動機づけが高い(低い)児童は楽しさが低い(高い)ということであった。したがって、運動をすることが楽しいと感じられる体育授業を展開するためには、内発的動機づけを高めることのみならず、非動機づけを低下させることもできる課題志向性を促す指導の方が、自我志向性を促す指導よりも、有効であると考えられる。両志向性を促す指導によって内発的動機づけが高められることも考えられるが、課題志向性と共に自我志向性を促すことのメリットは本研究の結果からは読み取れない。例えば、内発的動機づけへの影響については、課題志向性の方が自我志向性よりも圧倒的に強い影響力があること、また、非動機づけに隣接する外的調整は、課題志向性によって低下させることができると考えられるが、両志向性を促すことになれば、課題志向性以上に自我志向性の影響力が強いため、外的調整は高められることになると考えられる。したがって、両志向性を促す指導

を展開するにはリスクが伴うことを理解しておく必要があるだろう。

付記

本研究の趣旨にご賛同し、ご協力下さいました児童の皆様、各小学校の先生方に深く感謝申し上げます。

文献

- Duda, J. L. (1989). Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 3, 318-335.
- Duda, J. L. (2001). Achievement goal research in sport: Pushing the boundaries and clarifying some misunderstandings. In Roberts, G. C. (Ed.), *Advances in motivation in sport and exercise* (pp. 129-182). Champaign, IL: Human Kinetics.
- Duda, J. L. (2005). Motivation in sport: The relevance of competence and achievement goals. In A. J. Elliot & C. S. Dweck (Eds.), *Handbook of competence and motivation* (pp. 318-335). New York: Guilford Press.
- Duda, J. L., & Hall, H. K. (2001). Achievement goal in sport: Recent extensions and future directions. In R. N. Singer, H. A. Hausenblas, & C. M. Janelle (Eds.), *Handbook of research of sport psychology* (2nd ed., pp. 417-434). New York: Wiley.
- Duda, J. L., & Ntoumanis, N. (2003). Correlates of achievement goal orientations in physical education. *International Journal of Educational Research*, 39, 415-436.
- Dweck, C. S. (1999). *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. Philadelphia: Psychology Press.
- Elliot, A. J., & Dweck, C. S. (2005). *Handbook of competence and motivation*. The Guilford Press: New York.
- Guay, F., Vallerand, R. J., & Blanchard, C. (2001). On the Assessment of Situational Intrinsic and Extrinsic Motivation: The Situational Motivation Scale (SIMS). *Motivation and Emotion*, 24, 175-213.
- Harter, S. (1981). A new self-report scale of intrinsic versus extrinsic orientation in the classroom: motivational and informational components. *Developmental Psychology*, 17, 300-312.
- 細田朋美・杉原隆 (1999). 体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響. *体育学研究*, 44, 90-99.
- 伊藤豊彦 (1996). スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討. *体育学研究*, 41, 261-272.
- McAuley, E., Duncan, T., & Tammen, V. V. (1989). Psychometric properties of the intrinsic motivation inventory in a competitive sport setting: A confirmatory factor analysis. *Research Quarterly of Exercise and Sport*, 60, 48-58.
- Mullan, E., Markland, D., & Ingledew, D. K. (1997). A graded conceptualization of self-determination in the regulation of exercise behavior, Development of a measure using confirmatory factor analytic procedures. *Personality and Individual Differences*, 23, 745-752.
- 村山航 (2003). 達成目標理論の変遷と展望—「緩い統合」という視座からのアプローチ—. *心理学評論*, 46, 564-583.
- Nicholls, J. G. (1989). *The competitive ethos and democratic education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 西田保・小縣真二 (2008). スポーツにおける達成目標理論の展. *総合保健体育科学*, 31, 5-12.
- 西田保・磯貝浩久・北村勝朗・杉山佳生・伊藤豊彦 (2009). スポーツ動機づけの異文化間研究に向けて. *総合保健体育科学*, 32, 31-40.
- Pelletier, L. G., Fortier, M. S., Vallerand, R. J., Tuson, K. M., Briere, N. M., & Blais, M. R. (1995). Toward a new measure of

- intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation in sports, The Sport Motivation Scale (SMS). *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17, 35-53.
- Roberts, G. C., Treasure, D. C., & Balague, G. (1998). Achievement goals in sport: Development and validation of the perception of success questionnaire. *Journal of Sport Sciences*, 16, 337-347.
- Standage, M., & Treasure, D. C. (2002). Relationship among achievement goal orientations and multidimensional situational motivation in physical education. *British Journal of Educational Psychology*, 72, 87-103.
- 杉原隆 (2003). 運動指導の心理学. 大修館書店: 東京.
- 上淵寿 (1995). 達成目標志向性が教室場面での問題解決に及ぼす影響. *教育心理学研究*, 43, 392-401.
- 上淵寿 (2004). 達成目標理論の最近の展開 上淵寿 (編著) 動機づけ研究の最前線 (pp88-107). 北大路書房: 東京.
- Vallerand, R. J., & Fortier, M. S. (1998). Measures of intrinsic and extrinsic motivation in sport and physical activity: A review and critique. In Duda, J. L. (Ed.), *Advances in Sport and Exercise Psychology Measurement* (pp. 81-101). Morgantown, WV: Fitness Information Technology.